

「キレイな国づくり」「治安の確保」

自動化が進み人手を必要としなくなった製造業と供給過剰に加えて少子高齢化の中で生き残りを迫られているサービス業。そのいずれからあぶれる人がいる時代の中で、雇用を創出し経済を活性化させるのは、サービスの奥行きがより深い「ヒューマンライフケア産業」と呼ぶべき新産業だ。そこには、農業が関わることで果たせる「新たな役割」が見出せる。

ヒューマンライフケア産業

日本の雇用統計を見ると、製造業に従事している人は3割を切っており、7割が非製造業に携わっている。そしてその非製造業の代表格がサービス業である。

こうなった背景を考えると、製造業はどんどんイノベーションが進み、人の要らない自動化の製造へと舵を取ってきた。そうして製造業からあぶれた人をサービス業が吸収していった……となるはずだったが、現実とは違う。かつて経済成長して、需要に対して供給が足りない時代には、ワンストップ的なコンビニやファミレスのようなサービスが成長産業になり得た。しかしあの手先のビジネスモデルは、常に人口が増えていくという前提で成り立っている。

移民を受け入れて緩やかに人口を増やしている米国のような国では通用するが、日本は移民を受け入れて

おらず、少子高齢化が進んでいる。つまり製造業からあぶれた人は、またさらにサービス業からあぶれる可能性があるのだ。

だからこれから日本の中で新たな雇用を見出し経済を活性化させるのは、これまでのサービス業よりもさらにサービスの奥行きが深い分野になっていくだろうと思う。私はこの新産業を「ヒューマンライフケア」と呼んでいる。「ケア」というと、「老人介護」に限定されがちだが違う。若くとも、ベビーシッターや家事手伝いといったサービスが必要な人もいる。

ヒューマンライフケア産業では、モノを運ぶ宅配業にもよきめ細やかなサービスが附加されていく。たとえば、ゴルフ場にクラブ一式を送るのがこれまでのサービスであるなら、タグをつけず、専用の傷が付かないようなダッシュボードで送って、ゴルフクラブを全部磨いて、バッグも綺麗にする。普通は1000円ぐ

らいかかる配送料金にそれならば1万円払いますよという人も十分いるのではないだろうか。クロネコヤマトに「ゴールドネコヤマト」が誕生する発想だ。

先に述べた雇用統計の3対7でいえば、サービスの7のほうが増えているって、3の方が減っていくわけだから、サービスの質がとことん求められていく。

そのなかで、我われ農業経営者がこれに類似するようなサービスが作り出せるのかと想像してみる。

まず、我われが得意とするライフケア分野は環境分野である。農業技術とランドスケープ、ガーデニングを統合的に応用して、水をキレイにする、景観をキレイにしていける。モノの生活で満たされたとき、人は暮らしの基本である環境を良くするサービスへの志向が高まる。具体的には、緑や花で豊かな街づくり、家づくりに貢献することだ。これまでは造園業者がカバーしていた分野だ

和の郷の精神⑬

木内博一の

のマネジメントと

郷の精神⑬

和を育み

We bring up harmony

郷土を敬し

We respect our native district

園芸を志す

We aim at horticulture

木内博一・Hirokazu Kiuchi

1967年千葉県生まれ。農業者大学卒業後、90年に就農。96年事業会社(和郷)を、98年生産組合(農)和郷園を設立。(和郷は2005年に(株)和郷に組織変更。生産・流通事業のほか、リサイクル事業や冷凍工場、カット・パッキングセンター、直営店舗の展開をすすめる。05年海外事業部を立ち上げ、タイでマンゴー、バナナの生産開始。07年日本から香港への輸出事業スタート。現在、ターゲット国を拡大準備中。本連載では、起業わずか10年でグループ売上約50億円の農系企業を築き上げた木内の「和のマネジメントと郷の精神」。本連載ではその「事業ビジョンの本質」を解き明かす。

東京の治安を農業で確保

が、農家が参入していけないわけではない。まだ公開できないが、現在、全く新しい視野からライフケアと環境貢献を融合したサービスを思考実験している最中だ。「キレイな国づくり」が志だ。

これまでの例だとヒューマンライフケア産業は高所得者向けサービスイメージされるかもしれないが、それは違う。所得の多少に関わらず、肝心なのは、一人ひとりの人生をどこまでケアできるかの懐の深さだ。

サービスが深化する時代、農業のもう一つの役割は「治安の確保」だ。唐突に聞こえるかもしれないが、私はいずれの日本、特に東京の治安について危機感を持っている。若いときから、千葉の田舎と東京を頻繁に行き来する生活を送ってきたから現実的に見えている。手に職があり、一生懸命働いている若者が堅実な人生設計をする希望が見出せない世の中がそこにある。これは、不景気や失業より構造的な深刻さだ。

付き合っている地方から東京に出てきた居酒屋の店長をモデルにしてみよう。10年近くも、20万円弱の給料で朝から晩、いや翌日の早朝まで働いている。とてつもなくしんどい

仕事のわりに待遇は改善しない。お金も貯まらない。家庭を持つことも想像できない生活だ。結局、サービスが低付加価値で争い合う中、こうした若者が消耗戦を強いられる。そして、自分の代わりはいくらでもいる世界に生きていくことを知っている。これ以上登れない階段に必死にしがみついているようなものだ。そのうっぶんたるや、我われ田舎の農業者の想像を超えている。

こうした層が社会に一定割合増えた時、どこの世界でも治安が目に見えて悪くなっていくのは明らかだ。

では、農業の事業者として、彼のヒューマンライフにどう貢献できるか真摯に考えてみる。彼の将来への不安定性の根源は何かといえば、可処分所得がない、かつ、給与が上がらない、そして、住居が持てないの「3つのない」だ。

そんな彼らに、都会から1時間の距離にある和郷園の農村風景を感じてもらい、休日に農作業を手伝うことで新たな目線から都市と農村を融合し

たライフスタイルの構築を目指してもらいたい。彼らの生産物を和郷園が購入することも考えられる。また、職業的に考えると都市主業と農村兼業を組み合わせたライフスタイルが新しい価値観の創造につながるだろう。そんな方向を目指す考えもあり、和郷園では農園を500区画ほど整備している。ものづくりは人づくりへ、基本的な農業の精神で今新たに取り組んでみたい。



和郷園は、2011年6月、千葉県香取市に一般・法人を対象にした貸し農園「the-farm」をオープンさせる。面積6ha、500区画ほどになる予定だ(写真はイメージ)。